

# 政争の国

新井 宏

日本人は「いいかげん」である。お宮参りで始まり、七五三で神社に参り、教会で結婚式を挙げ、葬式は仏式で行っても、まったく違和感がない。漢字の「行」を「コウ」「ギョウ」「アン」のほか「ゆく」「おこなう」と読んでも、不便だと思わないし、軍隊のないはずの国に立派な軍隊があっても、「まあいいじゃないか」と済ましている。

それに比べると韓国人はもったきちつとしていて、漢字の読みなどは全てひとつに統一している。ひとことで言えば、日本人よりも「いいかげん」ではなく、原則を重視する人たちである。

ところで、精神分裂症患者は「いいかげん」ができないという。例えば、一から九までの数字をでたために言ってくださいと指示されても、一二三四と順番にしか言えないし、軽症でも一の次に九とか、できるだけ離れた数字を言うそうである。

これを政治の場に当てはめたらどうなるであろうか。政治とは、もともと妥協の場であるから「いいかげん」ができないと現実的な対応にならないし、その結果として、政治に分裂症が発生してむしろ対立が激化する。朝鮮の歴史がまさにその代表例である。

だから韓国の学生たちにはしばしば「いいかげん」の効用を説く。その時に持ち出すのが、十九世紀初の日本と朝鮮の比較である。

その頃、日本も朝鮮も厳しい鎖国を行っていたのは同じであったが、「いいかげん」だったのは日本である。オランダという風穴を通じて最新の医学書や大砲、製鉄書が次々ともたらされ、またたくまに筆写され、各地に広まっていた。幕末にはオランダ語を解するものが三千人にのぼったとの説さえあり、鎖国の原則とは異なり、それらの人材が身分を問わずどんどん登用されていた。攘

夷を唱えて幕府を揺さぶっていた薩長が政権を掌握するや、いきなり開国にふみ切った。

それに対して朝鮮の両班支配層には、西欧語を解するものなど皆無であり、条約文の読解さえ宗主国の清にたよらざるを得ない状況であった。そのため日本は西欧に半周遅れでついて行けたのに、朝鮮はレースに参加することさえできなかった。

いまま韓国は政治の国である。いや政争の国である。全斗煥や盧泰愚・元大統領にいったんは死刑あるいは懲役刑を下さねば気がすまず、金泳三や金大中・元大統領の息子たちもいったんは獄に繋なされた。

その上に現在の盧武炳政権は、「親日真相糾明法」をつくり親戚縁者の過去まで遡及して政敵を圧迫しようとしており、それでも足りずに「過去清算法」を作って、「漢江の奇跡」をもたらした朴正熙元大統領さえ断罪しようとしている。日本人の感覚ではもう「いいかげん」にしたらどうかと思う。

しかしそれは朝鮮の歴史そのものである。一三九二年に太祖・季成桂が建国してから、日本に併合されるまでの五百年間に、どれだけ多くの党派抗争が起こり、どれだけ多くの王族や士林たちが肅清されたことであろうか。日本で言えば、室町から徳川幕府の時代に相当する期間。類例として思い浮かぶのは豊臣秀吉が養子秀次を高

野山に追放し切腹させたことと、徳川家光が実兄・駿河大納言忠長を甲府に蟄居させた上で高崎で自刃させたことくらいであろうか。

それに対して朝鮮王朝は初代の太祖時代から政敵の殺戮で始まる。余計な議論よりも史実の羅列の方が迫力がある。以下、朴永圭「朝鮮王朝実録」(新潮社)をもとにして年表風にまとめる。

〔第一代太祖〕明の遼東を攻略するため、威化島に陣をおいていた季成桂は、矛先を変えて高麗の都・開京を陥落させ、一三九二年に季氏朝鮮を建てる。高麗の最後の王に擁立した恭讓王は後に処刑してしまう。

◇第一次王子の乱(一三九八年) 太祖が八男の芳碩を世子に定めたことに反対して、建国の功労者・五男芳遠(第三代太宗)は、異腹の実弟の芳碩と芳蕃および儒教面の建国指導者・鄭道伝などを殺害する。

〔第二代定宗〕一三九九年、クーデター実行者の芳遠が、時期尚早と見て王位を辞退したので、太祖の次男・芳果が暫定的に定宗となる。

◇第二次王子の乱(一四〇〇年) 太祖の四男・芳幹が起こした反乱を芳遠が鎮圧し、芳幹を配流する。

〔第三代太宗〕一四〇〇年、定宗は自ら身を引き、芳遠が太宗となる。

◇閔無咎兄弟の獄(一四〇七年) 太宗の世子問題をめぐる外戚・閔氏の反乱。結局、閔氏一族をほとんど自決させる。

◇第四代世宗(一四一八年、太宗の長男がいったん世子となっていたが、奇行ありとして廃され、三男の忠寧が世宗となる。ハングルをつくった聖君として知られ、肖像が一万ウォン札に使われている。

◇第五代文宗(一四五〇年、世宗の長男が文宗となるが、在位二年で病死。

◇第六代端宗(一四五二年、文宗の唯一の子が十一歳で端宗となる。

◇癸酉靖難(一四五三年) 幼い端宗に代わって、文宗の遺命を受けた金宗端や皇甫仁などが執権するが、世宗の次男・首陽大君の勢力に対抗するため、世宗の三男・安平大君と組む。これに対して首陽大君が起したクーデターで、金宗端・皇甫仁など多くの大臣たちを惨殺し、実弟の安平大君を自決させる。そしてその後も端宗をとりまく実弟・錦城大君や王族、宮人、官人を配流に処する。

◇第七代世祖(一四五五年、首陽大君が王位を篡奪して世祖となる。

◇端宗復位運動(一四五六六年) 端宗の復位を計画した集賢殿出身の学士たち十七名を処刑、その後、配流していた錦城大君を殺害し、端宗に死葉を与える。

◇第八代睿宗(一四六八年、世祖の次男が睿宗となるが在位一年で夭逝。

◇南怡の謀反(一四六八年) 世祖治世下で武人として実力を蓄えた南怡に対して、世祖の遺臣の申叔舟(ハングル創成の中心人物で、日本にも来たことがあり『海東諸国記』を編んだ)たちが、柳子光の計略を入れて謀反を起させ、武人官僚を約三十名を処刑し、その一族を奴婢に落とした。

◇第九代成宗(一四六九年、世祖妃の貞熹王妃は、夭逝した長男・懿敬世子の次男で十二歳の者乙山君を成宗として王位に就ける。

◇龜城君の配流(一四七〇年) 幼い成宗の即位は、端宗の場合と状況が似ていて、実力者となっていた世宗の四男の息子・龜城君に対する警戒が必要であった。そのため先手を打って龜城君を執拗に弾劾し配流してしま

う。

◇尹妃の廢妃(一四八二年) 第十代となる燕山君を生んだ尹妃は嫉妬深く、成宗の顔に爪で傷つけ廢妃されたが、その後の処遇を巡って政争が起こり、ついに尹妃は死葉を与えられる。これが後の甲子士禍の原因となる。

◇第十代燕山君(一四九四年、成宗が後継に望んだ晋城大君は、まだ六歳で現実的ではなく、既に世子の地位にあった燕山君が廢妃の子であるが王位につく。稀代の暴君として知られる。

◇戊午士禍(一四九八年) 成宗は世祖時代の功臣(勲旧派)に対抗するため、性理學(朱子學)の士林勢力を引き入れる。その代表格が金宗直である。ところが燕山君時代になると柳子光を中心とする勲旧勢力が、金宗直の書いた「弔義帝文」を見つけ、これが世祖の王位篡奪を非難するものと反撃にでる。これに学問嫌いの燕山君がのり、故人となっていた金宗直を「剖棺斬屍刑」に、その門下生を「凌遲処斬」の極刑に処し、多くの士林たちを配流、左遷してしまふ。

◇甲子士禍(一五〇四年) 威臣勢力の任士洪が勲旧派と残存士林派を一挙に除去しようと考え、燕山君に実母の廢妃賜死事件の真相を知らせたことから生じた事件。燕山君は、まず成宗の妃・巖貴人と鄭貴人を宮中の庭で斬殺し、鄭貴人から生まれた弟の安陽君、鳳安君を配流し死薬を送り、ついには祖母の仁粹大妃を撲殺してしまう。そして廢妃賜死に賛成した者を徹底的に探し出し、三十名以上を残酷な刑に処し、子供や家族にまで累をおよぼせた上に、故人の場合は「剖棺斬屍刑」に処した。

〔第十一代中宗〕一五〇六年、中宗反正で成宗の貞顕王妃の長男・晋城大君が中宗となる。

◇中宗反正(一五〇六年) 燕山君は学問を嫌い、学者を排斥し、気に入らない臣下を殺し、各地から美人を集め侍らせ、伯母にあたる美人の朴氏夫人を宮中で暴行し

て自死に追いやるなど異様な行動のため、成希顔や朴元宗(朴氏夫人の弟)のクーデターで王子の身分に落とされ、江華島に流され、二ヵ月後に死亡する。

◇己卯士禍(一五一九年) 勲旧派によつて推戴された中宗は、かれらの過大な勢力膨張を防ぐため、士林派の巨頭・趙光祖を起用した。しかし趙光祖の過激で性急な改革は、勲旧派を追い詰め、ついには中宗まで圧迫するようになり、中宗は逆に趙光祖などを自決させ、數十人を配流してしまつた。

〔第十二代仁宗〕一五四四年、二十九歳で即位した中宗の長男・仁宗は己卯士禍の際に被害にあつた士林派の名誉を回復するが、わずか九ヶ月の在位で死亡する。義母の文定王妃による毒殺説もある。

〔第十三代明宗〕一五四五年、文定王妃から生まれた中宗の子・慶源大君が十一歳で明宗になる。

◇乙巳士禍(一五四五年) 仁宗の生母である章敬王妃の弟・尹任やその一派を除くために、文定王妃の弟・尹元衡一派が仕組んだ肅清で、成宗の三男・桂林君や尹仁など十名を自決あるいは処刑し、彼らの家族や一派の士林勢力を配流した。

◇良才駅壁書事件(一五四七年) これも尹任一派の殘党狩り、中宗の八男の鳳城君を自決させ、尹任の親戚の季約寿などに死薬を下し、士林系人物を二十余名配流したほか、あいまいな理由で多くの人びとを殺した。

〔第十四代宣宗〕一五六七年、明宗に嫡子がなかったため、中宗の庶子・徳興君の三男で十五歳の河城君が宣宗となる。初めての庶出の王であり、外戚がなかったことと、宣宗が性理学の信奉者であった関係で、千ウオン札の季湜(退溪)や五千ウオン札の季珥(栗谷)を国師として待遇し士林勢力を重用する。

◇己丑獄事(一五八七年) 士林派の重用は士林派内に西人(主氣哲学的な季珥の畿湖学派)と東人(主理哲学的な季湜の嶺南学派)の対立をもたらした。その最初の大事件が東人・鄭汝立の謀反容疑で、西人の巨頭・鄭澈によって、東人派は杖殺などを含め千人近くが肅清された。

◇世子問題の抗争(一五九一年) こんどは逆に鄭澈が、宣宗の世子問題をめぐって、東人派の季山海の計略にかかり、流血の肅清にあい西人派は失脚する。しかし東人派もこの肅清過程をめぐって、過激派の北人派と穏健派の南人派に分裂し、さらに北人は小北と大北に、大北は骨北、肉北、中北の三派に分裂する。一方の南人は西人に近づく。

◇壬辰倭乱および丁酉再乱(一四九二〜一四九八年) 日本の情勢をさぐるため送られた西人派の正使・黄允吉は豊臣秀吉が必ず侵攻してくると報告したのに、東人派の副使・金誠一は侵攻の兆しはなく、秀吉は恐るにたぬ人物と報告した。この時は、世子問題で西人派が

失脚した直後であり、朝廷は金誠一の意見を探る。党派抗争の弊の典型であった。戦争中に宣宗の庶出の臨海君(長男)と順和君が加藤清正の捕虜となっている。

〔第十五代光海君〕一六〇八年、壬辰倭乱後に宣宗が没すると、庶出の次男・光海君が即位する。庶出の長男・臨海君は粗暴との理由で除かれ、嫡出の永昌大君は宣宗の望みにもかかわらず三歳では現実性がなく対象とならなかった。

◇臨海君殺害(一六〇九年) 光海君は王位継承に反対した小北派・柳永慶を殺害する一方、王位の障害となる同腹兄の臨海君も殺してしまう。

◇金直哉の獄事(一六一二年) 永昌大君を支持する小北派が、光海君と大北派を除こうとしているとの疑いがかげられ、虚偽の自白を強いられたことから大規模な獄事に発展した。この獄事で宣宗の孫の普陵君(順和君の子)や金直哉などが処刑されたほか百余名の小北派が肅清された。

◇七庶の獄・癸丑獄事(一六一三年) 有力者の庶子たち七人が起した殺人強盗事件が政争に利用され、永昌大君の生母の父・金悌男が自決を命じられ、翌年には八歳の永昌大君が蒸し殺しにされてしまった。この事件で西人派・数十人投獄され、壊滅的な打撃を受けた。

◇申景禱の獄(一六一五年) 申景禱が謀反を起すに際し、綾昌君を推戴しようとしたという理由で綾昌君を配流

後、殺してしまふ。綾昌君は宣宗の五男の定遠君の子で、後に仁祖となる綾陽君の弟。

〔第十六代仁祖〕光海君は王権強化のため、王位を脅かす人物を全て除去するのに成功したが、宣宗の王妃であった仁穆大妃の尊称まで廢して西宮に幽閉してしまふ。そのことが、かえつて反正の名分を与えてしまつた。外交政策面で新興の金女真族に現実的な対応をとる光海君に対し、「親明背金」を採る西人派の巻き返しでもあつた。一六二三年、宣宗の孫・綾陽君が仁祖となる。

◇仁祖反正(一六二三年) 綾陽君が西人派と起こしたクーデター。光海君を捕らえ江華島へ配流する。この結果、西人派が第一党、南人派が第二党になるが、地方には実力ある北人派が残る。

◇季の乱(一六二四年) 西人派が仁祖反正後も残る北人派の勢力を殺ぐ目的で、金女真族へ備える北方守備の任にあつた季適に謀反の疑いがあると上疏した。そのため、謀反の疑いが、ついに実際の反乱にまで發展してしまひ、一時的とはいえ季適がソウルを占拠するほどの勢いであつた。この時、西人派は獄に閉じ込められていた大北派を数十人処刑してしまふ。

◇丁卯胡乱(一六二七年) 丙子胡乱(一六三六年) 金淸の侵攻により、仁祖は最終的に清に降伏し三田渡で屈辱の城下の盟の礼を行う。当時の西人派が大明事大主義に

陥り国際情勢を読み取ることができなかったことに原因がある。ここにも党派抗争の弊がでた。

◇昭顯世子の死(一六四五年) 丙子胡乱で清の人質となつた昭顯世子と鳳林大君は対照的な反応を示す。昭顯世子は清で西洋文明に触れて親清的になり、清との円満な関係を持つようになる。そのことが三田渡の屈辱でますます反清的になつていた仁祖との対立を生み、仁祖は清が昭顯世子を王位につけるのではないかと恐れるようになった。その結果、昭顯世子を毒殺し、その妃一族を配流した上で、さらに妃にまで死薬を下し、彼らに仕えた宮女たちまでも杖死させてしまふ。そして反清的な傾向を強めた鳳林大君を世子とする。

〔第十七代孝宗〕一六四九年、仁祖の次男・鳳林大君が孝宗となる。

◇金自点の謀反(一六五一年) 孝宗となつた鳳林大君はますます反清的な傾向を深め、北伐のための軍事力増強に乗り出す。そのため親清派が除去されるが、その過程で金自点が反乱を起す。彼は息子たちとともに死刑となり、仁祖の後宮の趙夫人にも死薬が下される。

〔第十八代顯宗〕一六五九年、孝宗の嫡男が顯宗になる。

◇南人派と西人派の礼論政争(一六五九〜一六七四年) 顯宗の時代は礼論政争に明け暮れる。まず孝宗の服喪期間をめぐつて大論争となる。これは本来なら長男の昭顯世子の系統に王位を継ぐべきなのに、次男の孝宗が

継いだことよって生じた混乱で、それぞれの主張は党派の正当性ともからみあい、極端な感情的な対立を生んだ。この政争は孝宗の妃・仁宣王妃の死の時も、顕宗の死の時も繰り返された。

第十九代肅宗「一六七四年、顕宗の嫡男が肅宗となり、王権を強化するため故意に換局政治を行い、各派を操った。

◇庚申換局(一六八〇年) 軍需物資のテントを南人派が勝手に使っていたことを咎めて、南人派が占めていた軍権を全て西人派に与え、南人派を大量に殺害し配流した。この結果、西人派が政権を執るが、その西人派も南人派に対する処分をめぐり、強硬派の老論派と穏健派の小論派に分裂する。

◇己巳換局(一六八八年) 肅宗が後宮・張氏の生んだ庶子・昉を世子にし、仁顯王妃を廃妃にして、張氏を王妃としようとしたことに対して、西人派、特に老論派が強く反対した。その結果、反対した首謀者たちは捕らえられ、政権は再び南人派に渡った。

◇甲戌換局(一六九四年) 肅宗が仁顯王妃を廃妃としたことを後悔しているとの情報に西人派が動いた。それを察知した南人派が西人派の完全な駆逐の機会として肅宗に報告した。しかし肅宗は南人派がこれ以上強大になるのを警戒し、かえって南人派を追放し、仁顯王妃を復位させ、張氏をもとの嬪に落とし小論派を復活さ

せた。

◇巫蠱の獄(一七〇一年) 仁顯王妃が亡くなった時に、嬪におとされが判明した張氏が、仁顯王妃を呪詛しようとしていたことが判明する。肅宗は張氏に死薬を下し、彼女の兄を処刑しようとするが、小論派は張氏が世子・昉の生母であることからこれに反対する。その結果、小論派は除けられ、また老論派が政権を握る。しかし時間の経過とともに、世子を支持する小論派が巻き返し、再び対等な勢力関係となって行く。

◇世子問題論乱(一七一七年) 世子・昉は病弱無子の身体であったため、肅宗は崔氏から生まれた延昞君を世子に据えることを意図し、延昞君を世子代理聴政とした。このため世子・昉を支持する小論派と延昞君を支持する老論派の間で党争が激化する。

『第二十代景宗』一七二〇年、党争激化の最中に肅宗が亡くなり昉が景宗となる。

◇辛壬士禍(一七二一〜一七二二年) 景宗は病弱で政治を執れないことで、老論派の主張を入れて延昞君を世子に決めた。しかし老論派はそれでは満足せず延昞君の代理聴政を強硬に要求する。これに対して小論派が上疏し老論派を一掃する。そればかりでなく、かつて世子時代に景宗殺害計画があったとして、四大臣を自決させ、百名近くを処刑し、配流した者も百名以上にのぼった。生母に死薬を与えるのを傍観した老論派への

仕返しであった。

〔第二十二代英宗〕一七二四年、延祚君が英宗となる。

◇乙巳処分(一七二五年) 景宗の時代に、用心深く振舞って生き延びた英宗は、各派の人士を公平に取り扱う蕩平策をとり、報復的なことはあまり行っていない。しかしそれでも老論派の上疏を受けて、辛壬土禍をおこした小論派領袖・金一鏡などを処刑し、大臣たちを追放している。

◇季麟佐の乱(一七二八年) 政界から追放された小論派の一部と南人の過激派が連合して、武力で政権を奪取しようとした事件。乱後、小論派が勢力を弱めたが、そのことでもかえって蕩平策が順調に進むようになる。

◇莊献世子事件(一七六二年) 英宗が健康上の理由で莊献世子に代理聴政を命じると、また世子を取り巻く南人派、小論派、小北派とそれに反対する老論派との対立が生じ、継妃たちによる世子と英宗の離間工作が生まれる。莊献世子にも宮女を殺すなど異様な行動があり、非行を訴える上疏によって、英宗は莊献世子に自決を命じ、それに応じないと米櫃に閉じこめ餓死させてしまう。原因は老論派と小論派の党派争いにあった。

〔第二十二代正祖〕一七七六年、莊献世子の子が正祖となる。父親の餓死で党争に嫌悪感をいだいた正祖は、英宗の蕩平策を受け継ぎ王権を強化するが、党争は四党派争いから時派(時流)に迎合する南人派と小論派および

一部の老論派と僻派(時流)に乗らぬ老論派の葛藤という新しい展開をもたらす。正祖の考えに沿う時派が勢いを得たが、カトリック問題で、僻派が巻き返しを図り、実学者・丁若鏞筆者が最も尊敬する学者らを左遷してしまい、近代化に乗り遅れてしまう。

〔第二十三代純祖〕一八〇〇年、正祖の嫡子が夭逝したため、次男が十歳で純祖となり、英祖の継妃・貞純王妃が垂簾聴政を行うようになる。貞純王妃は莊献世子の非行を英宗に告げた人物で、僻派を強力に支持しカトリックを排除する。時派にカトリックが多かったためである。

◇辛酉迫害(一八〇一年) 貞純王妃がカトリック禁止令を出し、連座制を採用して大規模なカトリック迫害を行い、殉教者や犠牲者が八百名以上にのぼった。南人派や進歩的な人士を除去するための政治的な一大粛正の面もあり、丁若鏞の兄弟たちも殺されたり配流された。

〔安東金氏の勢道政治〕一八〇五年、貞純王妃の垂簾聴政が終わると、娘を純祖の妃に入れた安東・金氏の勢道政治が始まり、これが第二十四代憲宗、第二十五代哲宗を通じて、六十年間も続く。この間は、党争もないが反対派もない独裁政治で、官僚社会の腐敗と社会の疲弊を生む。その間にも、西北人差別と勢道政権への反発から没落両班層と新興社会層が起こした洪景采の



乱(一八一一年)などがあるが、この乱は後に農民蜂起の性格を帯びて朝鮮社会の崩壊を加速することになった。そのほかにもカトリック迫害やいくつかの反乱が起こっているが省略する。

政争の歴史の紹介が長くなり過ぎてしまった。王位継承と複雑に絡み合った党派の盛衰は、とてもこの程度の整理では判るものではないが、韓国が政争の国であったことだけは理解していただけたであろう。

いま盧武炳政権は四大法案すなわち言論改革法、私立学校改革法、過去清算法、国家保安法廃止の成立を強行に推し進めている。いずれも民主化の流れに沿っているかのようではあるが、その裏には過去の政敵に対する牽制や報復が見え隠れしている。

このような国からであるから、小泉首相の靖国神社参拝問題などで、政治家が多少ゆるい発言でもしようものなら政治生命を失ってしまう恐れがある。しかし内心では「いいかげん」にしたいと思っている人達が増えていくのも確実であり、韓国は急速に変わっている。

むしろ小泉首相の方が、日本人らしくなく原則にとらわれて、靖国参拝を繰り返し返しているようにも見える。日本人ならもっと「いいかげん」な対応の方がふさわしいと思うのだが。田中角栄元首相は意表をついて中国との復交をはかっていたではないか。

だから、小泉首相はある意味で韓国で人気がある。現実主義者は憎まれるが、理想主義者や原則主義者はむしろ敵から愛される。

